

瀬戸内海備讃瀬戸海域の“沖積層”

Late Pleistocene to Holocene sediment in Bisan Seto Sea, Seto Inland Sea, Japan

井内 美郎[1]; 大平 亮[2]; 塩屋 藤彦[3]; 井上 卓彦[4]; 三井 拓也[5]; 岩本 直哉[6]

Yoshio Inouchi[1]; Ryo Ohira[2]; Fujihiko Shioya[3]; takahiko inoue[4]; Takuya Mii[5]; Naoya Iwamoto[6]

[1] 愛大・沿岸環境センター; [2] 愛大・理工; [3] 愛大・理工・環境; [4] 愛大・理工・環境; [5] 愛媛大・理工・生地; [6] 愛大・理工・環境

[1] CMES, Ehime Univ.; [2] Earth Science, Ehime Univ; [3] Environ. Sci., Ehime Univ; [4] Graduate School of Sci. and Eng., Ehime Univ.; [5] Earth Sci, Ehime Univ; [6] Earth Sci., Ehime Univ

瀬戸内海の海底には、陸域の海岸平野を構成する沖積層とほぼ同時期に形成された“沖積層”が分布する。“沖積層”は後氷期の海水準変動に伴って形成されたことから、瀬戸内海の全域に共通する層序学的特徴を備えている。そのうち沖積層の基底となるべき砂礫層の深度は、氷期の谷が紀伊水道と豊後水道の沖までつながっていたことから、太平洋側から瀬戸内海の奥に向かってより浅くなっているのが通例である。備讃瀬戸海域は、関門海峡や鳴門海峡などの一部の例外を除いて、最後に陸橋が切れた海域と考えられており、最も“沖積層”基底深度が浅い海域と考えられる。ところが、この海域の既存資料によれば、“沖積層”の基底深度は60mと異常に深い値となっている。

本研究では、これまで明らかにされてこなかった備讃瀬戸海域の“沖積層”の形成過程について、音波探査記録とボーリング資料を用いて検討した。そして、「異常に」深い“沖積層”基底面深度の原因として、最終間氷期以降の海水準変動との関係を推定した。